

文化財多言語化のための英文タイポグラフィ入門

Peter Yanase[†]

[†] 奈良文化財研究所

キーワード：タイポグラフィ、デザイン、多言語化

Typography for English Texts Related to Cultural Heritage

Peter Yanase[†]

[†] Nara National Research Institute for Cultural Properties

Keywords: typography, design, multilingualization

はじめに

近年は文化庁と観光庁の取り組みの影響で良質な多言語解説文は増えてきている。その一方で、最終的に公開されている成果物には、それぞれの言語の基本的なタイポグラフィのルールを守らないため、大変読みにくくなっているものが多い。これを改善するために文化庁は令和2年に「文化財の多言語解説案内の制作指針」を公開し、解説案内板の制作指針と英文タイポグラフィの基本マナーを簡略に解説している。ただ、本指針には英文タイポグラフィに関する具体的なアドバイスが述べられていない。そのため、本稿は、日本で最も広く使われている日本語版 Adobe InDesign の設定に沿って基本的な英文タイポグラフィを解説する。

InDesignの基本設定

日本でよく見かける残念な英文組版のほとんどは、デザイナーがそもそもソフトを英文組版用に設定していないことから生じたと考えられる。逆に言えば、基本設定さえしっかり行えば、熟練したタイポグラファーが作る文字組と同じにはならないものの、致命的なミスがほとんどない改善された組版が出来上がる。

1 文字パネル

1.1 フォントと文字サイズ

読みやすいタイポグラフィの第一歩は適切なフォントと文字サイズの選択である。文字サイズは用途とテキストの読者との距離などに合わせて選ぶものであるが、本文の文字サイズの目安としては、刊行物の場合は9～12ポイント、展示室の題箋などの場合は18～20ポイントが一般的である。ただし、同じポイントサイズでも、書体によっては大きさは全く違って見えることに注意が必要である。

Our Institute was established in 1952 as an auxiliary organization under the National Commission for Cultural Properties (the later Agency for Cultural Affairs).

Our Institute was established in 1952 as an auxiliary organization under the National Commission for Cultural Properties (the later Agency for Cultural Affairs).

図1 左右の文字組はフォントだけが異なり、文字サイズ、行送り、カーニングなどの設定は全く同じである。

つまり、ポイントサイズより、エックスハイト（小文字の高さ）の方が書体の視覚的な大きさを決める。とはいえ、エックスハイトが大文字の高さに近すぎると、今度は大文字と小文字の区別が難しくなる。また、解説文にはローマ字表記を入れるならマクロンが必要となるし、仏教用語をサンスクリット語で表記するなら専用のダイアクリティカルマークが必要となるかもしれない。各条件を満たしたフォントを選ぶ必要があるので、選択肢を慎重に検討しよう。ちなみに、奈文研の多言語化チームはNotoとSourceの二つのフォントファミリーをよく使用する。（実は、NotoとSourceはかなり複雑に絡み合っている。具体的に説明すると話が長くなるので、Noto Sans/SerifとNoto Sans/Serif JP【別名：源ノ明朝/Source Han Serifと源ノ角ゴシック / Source Han Sans】に含まれている英語のフォントは全くの別物であることだけ覚えていただきたい。JPの方には、ダイアクリティカルマークも、後程に述べるオールドスタイル数字も含まれていない。そもそも、太さ、サイズはもちろんのこと、デザインまで違う。そのためJPと無印の間には代替性が全くないので、取り扱いの際は注意が必要である。）

1.2 言語

言語は「英語：米国」を選択しよう。文化庁・観光庁が多言語化に関しては様々なガイドランスを公開しているが、どれも米国の英語の使用を前提しているのが一

貫している。何らかの事情であえて別の地域の方言を使いたい場合は、該当する方言を選択しよう。

1.3 カーニング

カーニングは迷わず「メトリクス」を選択しよう。「メトリクス」はフォントデザイナーがフォントに組み込んだ最良の設定である。

1.4 行送り

最新版の日本語版 InDesign の行送りの初期設定は文字サイズの 175 %になっている。これは英語にしては広すぎる。行送りをいったん英語版 InDesign の初期設定である文字サイズの 120 %に設定し、必要に応じて微調整しよう。例えば、エックスハイトが高いフォントを使う場合、1 行が長い場合や文字サイズが小さい場合は行送りをもっと広く設定する必要がある。テキストを実際読んでみて、行を読んでいる途中で目が違う行に飛ぶか、間違えて同じ行を二回読んでしまいそうになったら、行送りが狭すぎる可能性が高い。ちなみに、読みやすい行の長さは 45～75 文字ぐらいと言われているので、1 行が 90 文字を超えたら、二段組に切り替えるか、レイアウトを思い切り見直した方がよい。野外に設置された文化財の解説版には小文字で延々と続く長い行で組まれたレイアウトはよく見かけるが、大変読みづらく、集中力があつという間に削られてしまう。

1.5 欧文合字

「欧文合字」は初期設定で「オン」になっているはずだが、念のために設定が変わっていないかを確認しよう。

1.6 OpenType機能

OpenType 機能がついているフォントを使用する場合、「プロポーショナル オールドスタイル数字」を選ぶと、本文によくなじむ数字の書体に切り替えることができる。ただし、オールドスタイル数字はキャプションや表に合わないの、何もかもオールドスタイル数字にしていいいわけではない。

2 段落パネル

InDesign のコンポーザーには「日本語」、「欧文」と「多言語対応」の三つのモードがある。名前だけ見ると、「多言語対応」を選択すれば何もかも対応できる

ように思われるかもしれないが、実はそういうわけではない。「多言語化対応」コンポーザーは日本語でも英語などのラテン言語でもない、インド、中東、東南アジアなどの言語用のモードである。英語の場合、「欧文」が正解である。また、それぞれのモードには「単数行」と「段落」が選べられるが、英語の場合は「段落」を選択しよう。

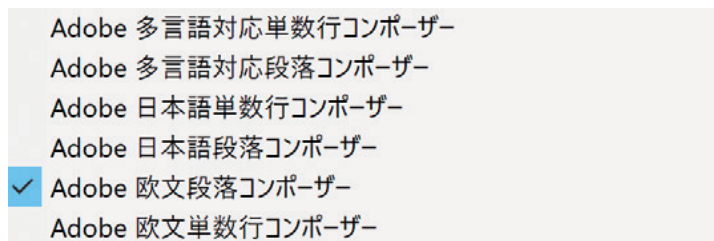


図2 コンポーザーの選択メニュー

2.1 文字組

本文は「左揃え」と「均等配置（最終行左／上揃え）」のどちらかを選択しよう。日本の組版のほとんどが「箱組」（＝「均等配置（最終行左／上揃え）」）なので、多くの方が行末が凸凹している左揃えに違和感を感じているようだが、英文では左揃えと箱組のどちらも普通である。箱組は行の長さがそろっているため、そのリズムに乗って読み進めることが楽であるが、ロービジョンや読書慣れしていない人にはワードスペースが均等な左揃えの方が読みやすいと言われている。また、文字組は左揃えの方が簡単なので、タイポグラフィに自信がない方は、左揃えの方が無難であろう。ただし、本稿の解説を最後まで読んでいただくと、箱組もさほど怖くなくなるであろう。

2.2 インデント

「1行目左／上インデント」は、フォントサイズをコピーしてまず同じサイズに設定しよう。ただ、英文のインデントは日本語のように「1文字」のサイズに統一されているわけではない。インデントを小さく感じたらもっと広くしてもいい。というより、行幅が長い場合はもっと広くした方がよい。とはいえ、無駄に広いのも見栄えが良くない。目安としては、レイアウトをパッと見て段落の数がすぐには言えなかったら、インデントを広げたほうがよい。

また、日本語はすべての段落に1文字のインデントを付けるのが一般的だが、英語は最初の段落と見出しの直後の段落をインデントしない。

インデントの代わりに段落間を1行を空けることもできるが、インデントと段落間の1行空けの併用は英文タイポグラフィの重大なマナー違反なので、絶対にやめよう。

2.3 ハイフネーション

「ハイフネーション」は初期設定で「オン」になっているはずである。文字組が左揃えの場合は、ハイフネーションを「オフ」にして、必要に応じて手動でハイフンを付けるのが一般的である。他方、箱組はハイフネーションが必須である。日本ではありがちなハイフネーションを「オフ」にした箱組のレイアウトは、非常に醜く、読みづらい。組版の他のところでいくら頑張っても、箱組でハイフネーションを「オフ」にしたら、全部台無しになってしまう。

2.3.1 左揃えの場合

先ほど述べた通り、基本的には手動で行うものだが、それが難しかったら、「ハイフネーション」を「オン」にして、「ハイフネーション設定」で「単語の最小文字数」を「8」に、「先頭の後」と「最後の前」を「3」に、「最大ハイフン数」を「3」に設定してみよう。また、「大文字の単語をハイフンで区切る」、「段落末尾の単語をハイフンで区切る」と「段間、フレームにわたる単語をハイフンで区切る」の三つを「オフ」にしよう。これで異常に長い単語の場合のみ、ハイフネーションが発動する。



図3 ハイフネーション設定の画面

2.3.2 箱組の場合

箱組にはハイフネーションが必須である。「ハイフネーション設定」は上記に述べた左揃えの設定とほぼ同じで、唯一の違いは「単語の最小文字数」を「8」では

なく「6」に設定するところである。

2.4 ジャスティフィケーション

「ジャスティフィケーション」は両端揃え専用設定である。ここは本来、フォントのサイズやデザイン等に配慮して慎重に設定するところだが、とりあえず「単語間隔」の最小値を「90 %」、最大値を「110 %」に、「文字間隔」の最小値を「-2 %」、最大値を「+2 %」に、「文字幅拡大／縮小」の最小値を「98 %」、最大値を「102 %」に設定してみよう。

ジャスティフィケーション

図4 ジャスティフィケーション設定の画面

おわりに

英文／欧文タイポグラフィは歴史が長い分ルールも多い。ここで紹介した設定とルールは氷山の一角にすぎない。本稿の目的は英文タイポグラフィの詳細な紹介でも、想定できるすべてのレイアウトとユースケースの対応でもなかった。そもそも、なぜこのような設定をお勧めするのかさえ、意図的に述べていない。とりあえず機械的に本稿で述べた通りの設定を行い、足並みをそろえよう。本当の英文タイポグラフィはこれからの先にある。日本語で書かれている欧文タイポグラフィに関する本が決して多くはないが、どれも分かりやすく、入手しやすい。以下何冊かをリストアップするので詳細はそれらに参照していただきたい。

- 『MORISAWA PASSPORT：英中韓組版ルールブック』

モリサワのウェブサイトから無料でダウンロードできるマニュアル。英語に加えて中国語、韓国語とタイ語の組版のルールと設定も解説されている貴重な資料。

- 『欧文組版：タイポグラフィの基礎とマナー』（増補改訂版）
日本人デザイナーがやりがちなマナー違反を取りあげながら英文タイポグラフィの基本的な考え方が述べられている一冊。
- 『新標準・欧文タイポグラフィ入門：プロのための欧文デザイン＋和欧混植』
日本でデザイナーとして仕事している著者たちが InDesign の細かい設定を紹介しながら英文タイポグラフィの詳細を語る教科書。
- 『ディテール・イン・タイポグラフィ：読みやすい欧文組版のための基礎知識と考え方』
著者が読みやすい欧文組版を追求してたどり着いた答えが簡潔に書いてある小さなマニュアル。
- 『1ページずつ学ぶ 文字レイアウトの法則』
英文タイポグラフィの基本ルールから出版物のレイアウトの決まり事まで1ページずつ図解する本。
- 『タイポグラフィ・ハンドブック』（第2版）
和・英文タイポグラフィのほぼ全てを網羅している一冊。